カスタムの情景 IN U.S.A

WEST (LAS VEGAS BIKE FEST)

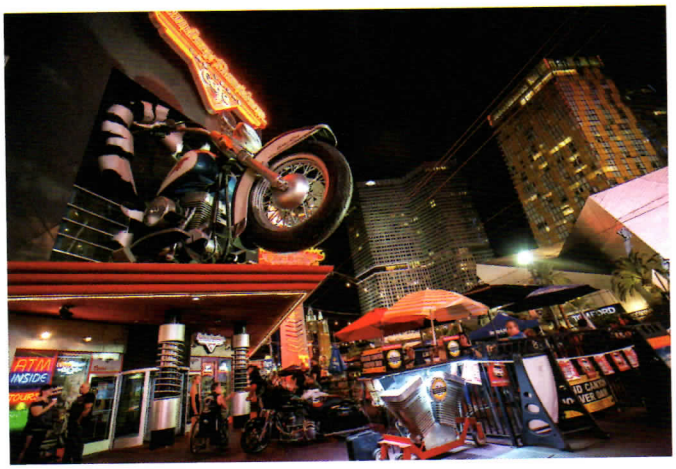
AMERICAN CUSTOM SCENE

WELCOME RIDERS

MOTEL
NORTH LOT
VENDORS,
MUSIC, FOOD

Vendors
12

AMERICA'S MOTORCYCLE LAWYERS
GEICO
Motorcycle
HONOR
SACRIFICE
LOYALTY



ラスベガスのディーラーがスポンサードしていることもあり、ギブアウェイ（くじを買うと抽選でバイクがプレゼントされる）があるのもフェストの人気の理由のひとつ。今回はスポーツスター、XG750などが幸運な当選者へ贈られた。写真左はベガスの中心地・ストリップのハーレーダビッドソンカフェ。残念ながらこのイベント後、10月をもって閉店となってしまった。

マッカラン空港への着陸を間近に控えた頃、NY発ラスベガス行きの機内にCAのアナウンスが流れた。「当機は間もなくラスベガス・マッカラン空港へ着陸いたします」その瞬間、機内の各所で歓声が上がった。初めての経験だった。それほどまでに、このラスベガスという街は人々を高揚させる妖気にも似た雰囲気を持っているのだ。エンターテインメントの街、そしてカジノを筆頭としたギャンブルの街というイメージが脳裏にインプットされている諸兄も多いことだろう。空港を降り立った瞬間から、そのイメージが間違っていなかったことを知らされるのは、到着ロビーに並ぶスロットマシンの数々。また、ちょっとした買い物でコンビニやガソリンスタンドに入っても、そこには同じくスロットマシンが鎮座しており、若者からお年寄りまで老若男女問わずマシンと向き合っている。ラスベガス。なんともクレイジーな土地である。

「ラスベガス・バイク・フェスト」は10月の第1週、木曜の午後から日曜日までぶっ通しで開催されるイベントだ。ラスベガスの中心街であるストリップからクルマで5分ほど走ったダウンタウンにあるフレモント・ストリートを4日もの間、このイベントがジャックする。そこではカスタムショーのほか、さまざまなイベントが分刻みで展開されており、来場者を飽きさせることがない。イベントは会場の中のみならず、例えば会場周辺をバイクで走るポーカーランが企画されていたり、会場から15分ほど走ったH-Dディーラーでも催しが予定されていたりと、それはまるでラスベガスを4日間バイク・パーティの会場にしてしまおうという勢いすら感じさせる。

ショーであることは間違いないのだが、むしろパーティ、またその名のとおりフェスト（お祭り）という表現が最も適しているラスベガス・バイク・フェスト。そもそも降雨量が端的に少ないラスベガスは今回も会期中もれなく快晴が続き、濃紺に近い空の下にきらびやかなバイクたちが際立って映えていた。

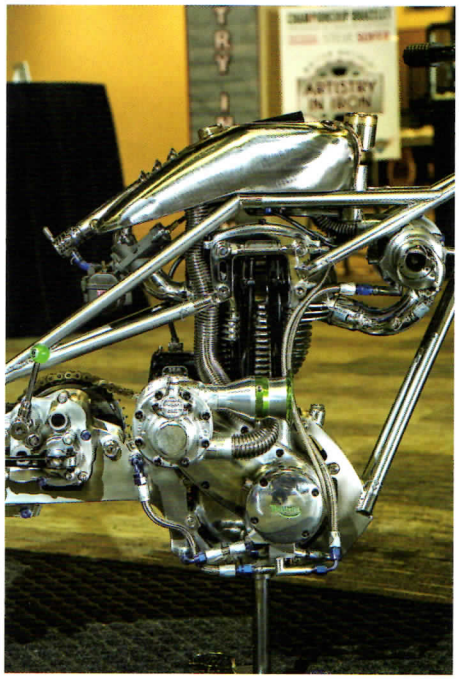
ギラついた空と太陽を、ギラついたマシンがにらみ返す。

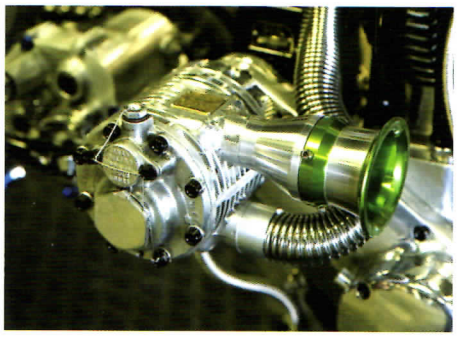
さて、メイン会場のフレモント・ストリートでは連日、アメリカの各カスタムマガジンが主催するカスタムショーが展開されている。特に圧巻だったのは金曜日の日中に開催された、バガー系雑誌のショーであった。エントリーされたバイクが次々にストリートを埋めていく。その台数にも圧倒されるが、マシン1台1台の尋常じゃないカスタムには驚くばかりだ。フロントホイールは30インチ超えで、フェアリングに接触せんばかりの存在感。そのフェアリングからタンクを経由してリアフェンダーにかけては流麗かつエッジの効いたバガーフェンダー、そしてどのマシンも手の込んだペイントが施されている。「コンパクトでシンプルなマシン」など皆無に等しく、極彩色と表現するにふさわしいマシンの数々がストリートを占拠する姿は実に強烈だった。

背景にはラスベガスのネオンサイン。そして上空に広がるどこまでも深い青。今まで目にしたことのないハードなコントラスト。しかしながら、この街にはそういうカスタムマシンが妙に似合ってしまうから不思議なものだ。夕刻、しばし会場から離れ郊外のディーラー「レッドロックHD」へ。ここにはボンネビル・ソルトフラッツに挑戦し続ける日本人、ヒロ小磯氏がメカニックとして勤務している。ここで開催されたのはウエットTシャツコンテストだ。端的に説明すれば、水に濡れて透けたTシャツを着たオンナたちがステージに登壇し、誰が一番セクシーかを決めるというものだ。言うまでもなくギャラリーの9割以上がバイクで駆けつけた野郎共であり、ステージ上の彼女たちがポージングを決めるたびに、惜しみない拍手と歓声を上げていた。土曜の夜には、メイン会場にてミスコンが催され、これもまた水着審査やバイクに跨がったセクシーポーズ審査など、エロスの要素満載で進行していく。昼間はゴージャスなバイクを飽きがくるほどに眺め、そして夜にはビールを片手にセクシーなオンナたちを愉しむ。

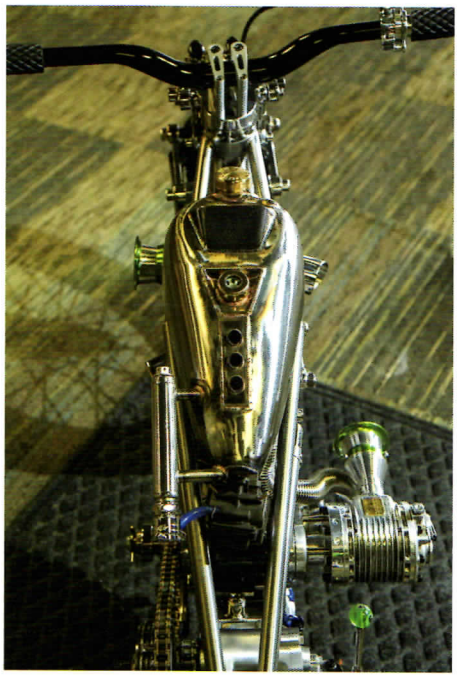
まったく、なんとも忙しいフェストである。

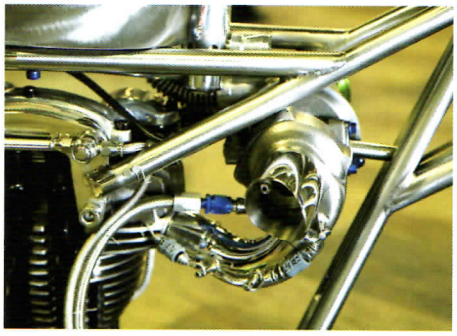
ミスコンでは露出に比例してギャラリーの歓声もアップ。ウエットTシャツコンテストはギャラリーの歓声で勝者が決まる。オンナたちは各自アピールに余念がない。

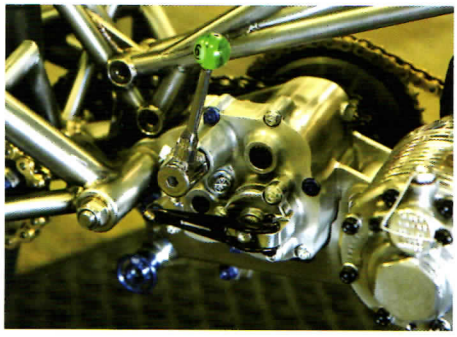


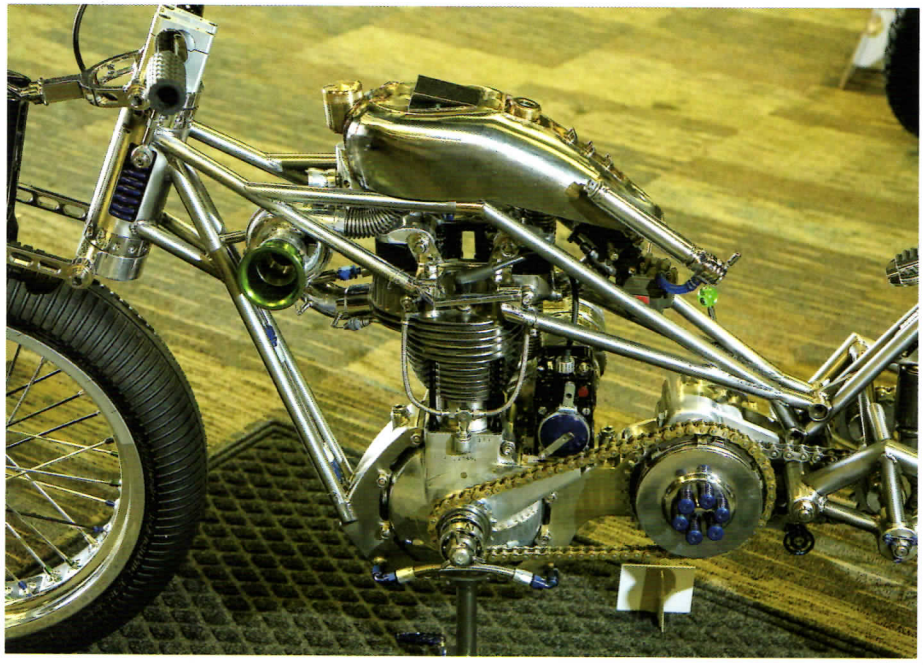


英国Rocket Bobs Cycle Worksのピートが製作した”Speed Weevil”。ボンネビル・ソルトフラッツでのレースにエントリーするべく造られたこのマシンだが、その見どころはあまりにも多い。エンジンは1935年製のトライアンフL2-1をベースにハンドメイド、ミッションは’65年製日本車のものを流用。フレームやスイングアームは塩平原を走るためステンレスで製作されたワンオフ。フロントフォークなどのギミックも大いに気になるところだが、何より特筆すべきは、ターボチャージャーとスーパーチャージャーの両方を搭載していることだ。 www.rocketbobs.biz









土曜の夜、アーティストリー・イン・アイアンの表彰が行われた。登壇するアワード受賞者の中にはHOG KILLERSアキ・サカモト氏の姿も。横浜HRCSにも持ち込んだ車輌での受賞となった。

フレモント・ストリート沿いにある元カジノホテルだった建物。ここがイベントのヘッドクォーターであり、またインドアカスタムショー「アーティストリー・イン・アイアン」の会場となっている。アメリカを中心に世界からトップ・ビルダーを招き、彼らの新作が発表される。マシンは4日間ここに展示され、最終的にはショーに招かれたビルダー自身による審査にて優勝者が確定。1万ドルの賞金と、高名なジュエリーデザイナー、スティーブ・ソッファの製作したワン&オンリーなチャンピオン・ブレスレットが贈られる。地元ラスベガスに店を構え、そのメタルワークで世界に知られるソーサ・メタルワークスなど、今年も実に個性的なビルダーがショーに招待された。中にはユニークなコンセプトを持ったマシンも。会場に入ってすぐ目に飛び込んできたのは真っ赤なサイドカー付スポーツスターだ。船の部分やサイドボックスには怪しげなボトルが隠されている。このマシンはM&Mカスタムズが手がけた「ムーンシャイン・ランナー」と名付けられた1台。ムーンシャイン＝密造酒を意味する。かつて禁酒法の時代、アメリカ各地で密造酒が作られていた。その密造酒を運搬する際、警察に捕らわれないようマシンをチューニングしたことがホットロッドのルーツだと言われているが、このスポーツはそれをオマージュした「密造酒運搬バイク」というコンセプトで製作されたという。その物語性と、どこかキュートなルックスが来場者の目に留まったのだろう。このマシンは来場者の投票で選ばれるアワード、「ピープルズ・チョイス」を獲得した。

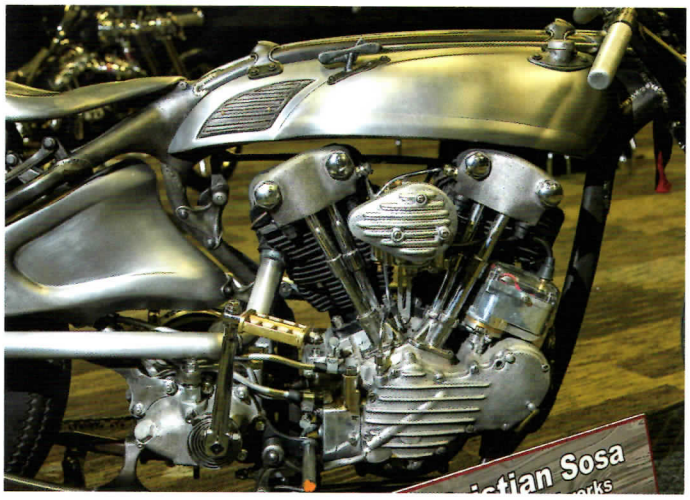
そして土曜日の夜には、ついに今年のアーティストリー・イン・アイアンの優勝者が決定した。栄冠を掴んだのはイギリス南部スウィンドンのショップ「ロケット・ボブズ」が製作したマシン「スピード・ウィーヴィル」。ビビッドな色彩のライバルたちを圧倒し、ベアメタルながらも、恐ろしく作り込まれたこのマシンが勝者に輝いた（詳細は前頁参照）。

強烈な個性の集いをベアメタルのスーパーマシンが制す。

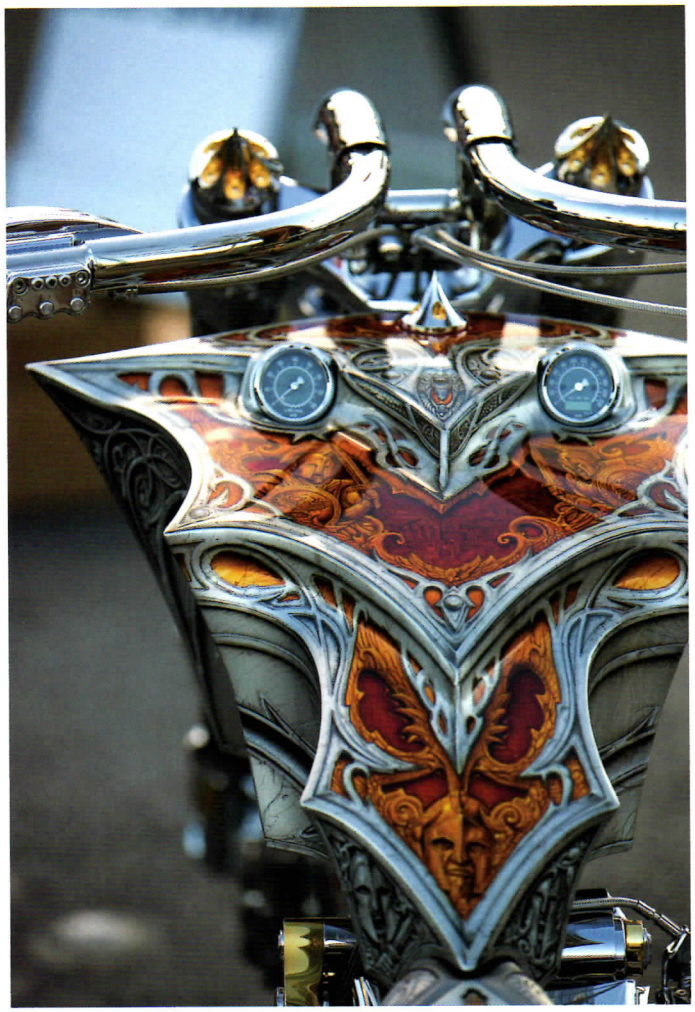
西海岸のモーターサイクル・カルチャーの発信地、カリフォルニア州に隣接するネバダ州ラスベガス。当然バイクフェストにもカリフォルニアからも数多くのショップが出店していたが、その中でも昨今のバガースタイルやクラブスタイルを牽引するショップのひとつである「ビッグ・ベア・チョッパーズ」は、スタントチーム「ストレート・アップ」を引き連れてのエントリー。1日2〜3回、会場内の特設コースにてスタント・ショーを行っていた。BBCにてクラブスタイルにカスタムされ、エンジンや足まわりにもチューニングを施されたFXRがギャラリーの目の前をバーンナウトしながら爆走する。ストレート・アップ（直立）の名のとおり、ほぼ垂直に近い角度でウイリーを決めていく彼らにギャラリーは大いに沸いた。西海岸ではバガーやクラブスタイルの人気は健在だ。会場を訪れる来場者たちのバイクも、概ねそのようなスタイルか、ストックに近いマシンが多い。旧車やチョッパーなどはあまり頻繁には見かけなかった。しかし、ライトなカスタムに軽装でベガスの街をぶっ飛ばしていくバイカーの姿はオールドスクールなバイカーとはまた違った格好良さがあり、何よりこの街の雰囲気と適合しているように感じられた。

4日間に渡って開催されたラスベガス・バイク・フェストは、かくして盛況のうちに幕を閉じた。初日に会場で渡されたイベントプログラムを目にした時、そこに記されたイベントラインナップの多さに軽い眩暈を覚えたものだったが、終わってみればあっという間だったようにも思う。それだけ息つくヒマもなかったのかもしれない。カスタムショー、ウェットTシャツ、ミスコン、ライブ……考えつく限りのモーターサイクル・エンターテインメントをすべて詰め込んだような、まさに全米随一のエンターテインメントの発信地・ラスベガス流のバイカーズ・イベントだった。アッパーなアメリカのシーンを体験したい諸兄にはぜひお勧めしたい場所だ。

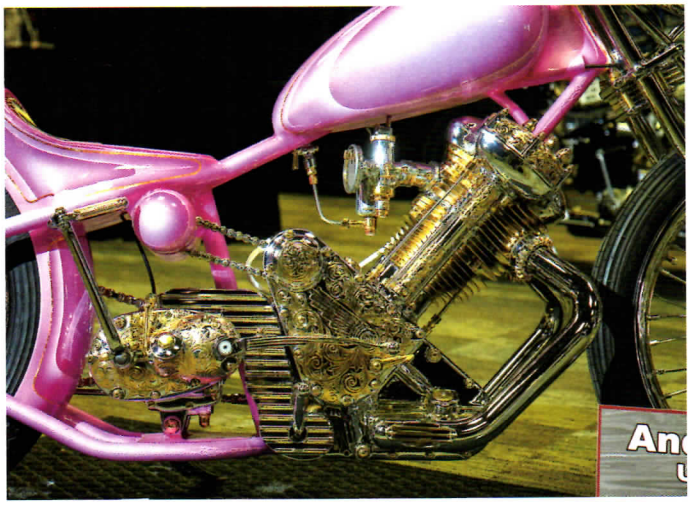
新生インディアンのブースには、艶やかな赤をまとったキャンギャルが（写真左）。来場者との記念撮影にも気さくに応じていた。ウイリーを決めるストレートアップのスタントクルー（写真右）。



AMERICAN CUSTOM SCENE IN WEST [LAS VEGAS BIKE FEST]



MOTEL



MMCCN1